

「動く紙おもちゃ作り」調査研究計画(1) 平成22年8月1日(日)  
 ※遠隔教育システムを利用(沖縄女子短期大学と岐阜女子大学) 指導者:水野政雄先生

観点(カテゴリー・分類)	評価目的	調査方法・処理	結果の分析・特性	参考
(1)イメージの変化	「動く紙おもちゃ作り」の学習前と後での「紙おもちゃ」に対する「おもしろい」「わかる」「たのしい」等イメージの変化を調査する。	イメージ調査・順序数1・2・3・4・5を用いて、その分布、前後の差を譲さ・処理する。※ただし、年齢の小さい子どもは聞き取り調査を行う。 (エクセルを用いて、分布処理・グラフ)	全体的なイメージの変化と特定の子どものイメージの変化を調査し、他の項目との関係を分析し、その特性を見出す。	多くの項目について調査が可能であれば、因子分析を用いて、基礎となる因子を見出す。
(2)内容の理解等 (事前・事後の変化、およびプロセスの評価)	学習前と後で、同じ内容について質問して、どの程度できるか、また、できるようになったか調査する。 (学習のプロセスは行動分析利用)	事前は簡単な質問、または、聞き取り調査をし、事後はプロセスも配慮し完成度を調査する。 (一人でどの程度制作が可能か観察者が判断)	どのように制作できるようになったか、判断する。(年齢、親子関係も調査)年齢との関係でその特性を見出す。	事前は、どこまでできるか。事後は、どこまで、できるようになったか。
(3)行動分析 (平成21年度の調査研究※を参考にする)	作制指導のプロセスについて、親子等の活動の様子を撮影記録し、行動を分析し、活動の状況を調査する。	平成21年度の行動カテゴリーを用いて、5秒間隔のサンプリング映像(時系列)を分析し、カテゴリー分布およびクロス処理を行う。	データ処理から、教材との関係で、その特性の分析および学習のプロセスの状況(時系列を用いて)を判断する。	平成21年度の論文等を参照する。
(4)自信度等 (理解との関係も配慮)	どの程度、自信をもって、制作できるか、正しい理解の状態と関連づけて評価する。	自信度としては、「①人に関して、②テキスト等を見て、③一人でできる、④他の人に教えられる」の四段階に分けて評価する。 (記述困難な子どもには聞き取り)	理解の状況と、自信度のクロス関係を調査する。 (正しく、どの程度の自信をもってできるか)	正答と自信、反応時間の研究は、藤田先生の論文に掲載されている。
(5)情意 (感情・意識)	制作の学習について、「おもしろい」「わかる」「たのしい」等の感情と意識の状況について調査する。	イメージ調査と同様に順序数を用いて、カテゴリー分析・処理を行う。	年齢・子どもの特性、親子関係行動等から、学習での活動を見て、その特性を調査する。	
(6)提示の方法	教える側の行動と行動の状況から、「どうであったか」を調査する。(説明、提示、教材、テキストなどとそれをどのように教師が扱ったか、その結果の関係)	線結び方式による調査を用いる。線結び方式が困難な時は、質問項目を決めて、観察者が尋ねて記述する。	内容と行動、結果の関係を結線の太さ(多いと太くする)で示す。教材の指導の課題・改善の方策を見出す。	坂元昂先生等の調査項目を基本に検討をする。
(7)意識 (意欲・探究心等)	学習の前後に、どのような意識を持って学習するか、また、したいかを調査する。	イメージ調査と同様に順序数を用いて、カテゴリー分析・処理を行う。(前後の調査が可能であれば、変化も調査する)	カテゴリー分布と、(1)(4)(5)との関係(クロス処理等)を調査し、学習の意欲・探究心等との関係を分析する。	質問紙は、(1)(4)(5)(7)を一枚にまとめてもよい。
(8)その他 (記述の調査・評価)	自由記述の言語データを必要な領域について、総合的な評価を行う。	言語活動について、言語行動カテゴリーを決めて、分析処理する。	記述(親の記述、また、観察者の聞き取りから、総合的な評価を(1)～(7)の結果と併せて行う。	行動記録(映像)の中から、言語活動を調査してもよい。 (ポトフォリオ等の言語の処理を検討する。)